

須藤孝也『キルケゴールと「キリスト教界」』書評

米沢 一孝

今年2015年は、セーレン・キルケゴール^{*1}の没後160年である。彼は、近現代の思想家に分類されるが、もはや「現代」の思想家ではない。彼の生きた「現代」すなわち19世紀前半から中葉と、我々が生きる21世紀という「現代」に差異があるのは当然である。

とはいえ、我々は、キルケゴールに限らず、いわゆる「古典」に接するとき、こうした視点を忘れがちである。キルケゴールを読むものにとって、彼が19世紀のデンマークに生き、取り戻すべき真のキリスト教を追求しその実現に一生を捧げたことを絶えず思い返す必要があるばかりか、この視点を忘れては、キルケゴールの思想を受け入れることなどできないのかもしれない。須藤孝也氏の著作『キルケゴールと「キリスト教界」』（創文社、2014年）は、キルケゴールの「現代」を考えることなしにキルケゴールの受容などありえない、という氏の主張、さらにはキルケゴールへの情熱さえ随所に感じられる力作である。

本書のタイトルには「キリスト教界」とあるが、須藤氏の論述は、デンマークにおける「キリスト教界」の現状を検証するにとどまらず、「人間学」と「キリスト教」という観点からキルケゴール思想全体を俯瞰し、さらには、キリスト教の世俗化や形而上学への批判的検討を中心とした20世紀の思想とキルケゴールとの比較にまで及ぶ壮大な構想によるもので、可能な限りキルケゴールへの批判にこたえようという意欲に満ちている。

キルケゴール研究者にとどまらず、近現代の偉大な思想家たちによる「世俗化」されたキルケゴール解釈を修正し、キルケゴールの思想がキリスト教の範

^{*1} 須藤氏の表記に合わせ「キェルケゴール」ではなく「キルケゴール」とする。また本書から引用した際には註に頁番号を記した。

圏内で解釈されねば必ずや誤解を招くことを、氏の実存にかけて示そうとしているようにさえ思われる。

キルケゴールの個人的な体験—とりわけ父の影響やレギーネとの悲劇—によって、彼の思想を読み解こうとする研究と須藤氏の論述とは一線を画する。須藤氏の方法は、キルケゴールが生きた時代のデンマーク思想と彼のキリスト教概念との関係を丹念に追うことでキルケゴール思想に迫るという、ここ数十年来の方法を尊重しつつも、以前の諸研究が、キルケゴールによる「キリスト教界」批判に傾注するあまり「キルケゴールと『同時的』であろうとし」*2、研究家本人の「現代」とキルケゴールの「現代」との差異を見失ったために、「安易にキルケゴールの議論を普遍化」*3し、その普遍化されたキルケゴールに「自身の思想的立場をも表明」*4して、彼の「思想を解明する作業を徹底できなかった」*5ことを反省し、キルケゴール研究において重視されているとは言いがたいキルケゴール以前のデンマーク思想の歴史を踏まえつつ、キルケゴールの思想をキルケゴールに倣い「間接的に」読み解くというもので、こうした方法は、「キリスト教の真理性を哲学的に解き明かすことではなく、キリスト者に成るといふ問題へと読者を直面させることと設定した」*6キルケゴールの著作活動の目的に忠実であろうとする須藤氏の明確な態度の表明でもあるだろう。

さて「キリスト教界とは、そこに生活する者がすべてキリスト教徒であることを自認する社会」*7だが、この社会では「神が人間となってこの世に來たり、愛の業を行った。しかしその愛があまりにも高すぎたために、キリストはこの世によって理解されず、嫌悪され、迫害され、十字架に磔けられて死んだ」*8という物語を信じず「キリスト教が何であるかをはっきりと知らない」*9にも

*2 7頁

*3 6頁

*4 6頁

*5 6頁

*6 110頁

*7 284頁

*8 287頁

*9 286頁

かかわらず、自らがキリスト者であると「錯覚」しているものたちによって構成されている、とキェルケゴールは考えた。だが、キェルケゴール自身にも特別な権限はなく、このキリスト教界の構成員の一員に過ぎない。そこで、キェルケゴールは、「現代」の「キリスト教界の『真の』キリスト教へ向けての改革」*10あるいは「修正」を目指すポレミカルな宗教的著作家として「キリスト者になる」という問題に関わるのみであり、彼「の議論は、キリスト教信仰を共有する人に向けられた議論」*11だったと、須藤氏は繰り返し主張するのである。

19世紀のデンマークでは、国家の弱体化とともにヨーロッパ情勢の流動化に翻弄される危機的な状況下で、グルントヴィに代表されるデンマーク・ナショナリズムが確立されようとし「『真のキリスト教』を求めて様々な運動が存在した」*12という。キェルケゴールも、自らがデンマーク人であることを忘れずに「現代」デンマークの状況を危惧しつつ自らの思想を深めた上に、その議論の対象が「キリスト教」に限定されているのであれば、キェルケゴールと「キリスト教界」との関係を考えることなしに彼の思想を考えることはできない。

キェルケゴールの主張する「キリスト教」は、内面性（プロテスタンティズム）と外面性（カトリシズム）、あるいは理念と現象という二元論に立脚するものであるが、こうした「キリスト教」は、合理主義的キリスト教理解が浸透したデンマーク国家教会に理解されえぬものであった。本来、国家教会もデンマークにおいてあるべきと思われる「キリスト教」を興すための組織である。「真のキリスト教」を目指すという方向性では、国家教会とキェルケゴールとは一致していたが、彼は合理主義的なデンマーク国家教会を「世俗化されたキリスト教」と断定し激しく批判した。

ところが、キェルケゴールは国家教会への就職を希望していた。キェルケゴールは、教会制度それ自体には批判的ではなかったため、ミュンスターの「自分で牧師養成所を創ったらどうか」*13との勧めには応じず、世俗化したデンマーク国

*10 294 頁

*11 446 頁

*12 150 頁

*13 314 頁

家教会の「修正」に固執したのである。

小生には、この闘争でキルケゴールが「修正」に終始した点に、小生はヘーゲルよりもよほど保守的であるキルケゴールの一面が潜んでいると思われた。ヘーゲルの思想を極力国民教会に取り入れようとする、ミュンスターの後任マーテンセンこそ、(当時としては)革新的な思想家であったと言えよう。「修正」に拘るキルケゴールは、確かにベンヤミンが言うように「ドイツ観念論の遅く生まれた子」*¹⁴だった、と思わずにはいられない。

また、須藤氏はキルケゴール後の思想家たちによる多様な解釈に否定的である。だが、こうした多様性は、キリスト教の真理性を問わないキルケゴールの著作活動に起因するものと考えられる。その点は、須藤氏も十二分に承知であるが、小生は、もし誤った解釈がなされてしまう可能性がキルケゴールの著作自体にあり、そうした問題が批判されるべきものであるなら、キルケゴール本人こそ批判されてしかるべきであると考え。「間接伝達」でなければ、自らの思想は伝達できないと考えていた以上、「正しさ」を論証できないようにするのがキルケゴールの意図だった、と言わざるを得ない。むしろ「正しさ」から批判するとキルケゴール思想の可能性を狭めてしまう。というのもある思想家の思想がその意図とは異なる仕方解釈されるのは、いかなる思想であれ歴史的必然である。特に、いかなる宗教も、風土に適した形で取り入れてしまう日本という特異な地域では、キルケゴールの受容も様々な形態があり得る。それは、キルケゴールの意図とは全く異なるものであろうが、そもそも「これがキルケゴールの思想だ!」と叙述できぬところにキルケゴールの思想の特色があるからこそ、人は「私のキルケゴール」にすぎないにも関わらず「普遍化されたキルケゴール」を語っているように錯覚するのであるが、世俗の人間である小生は、こうしたキルケゴール受容も「正しい」と思わずにはいられない。また、キリスト教の世俗化が進み、キリスト教それ自体の危機を思うのであれば、キリスト教に限定された理解だけが許されるキルケゴールを読むことが、

*¹⁴ ヴァルター・ベンヤミン「キルケゴール—哲学的観念論の終焉」『ベンヤミン・コレクション5 思考のスペクトル』浅井健二郎編訳(ちくま学芸文庫 2010年) 283頁

我々にいかなる意味があるのか、と世俗の人間として問わずにはいられない。

わが国の首相である安倍晋三氏は「日本を取り戻す」ためにたたかっておられるそうである。だが、その取り戻すべき「日本」の内実は今もって不明確である。一方、安倍氏が拒絶する現在の日本、すなわち「戦後レジーム」の内実もまた不明確である*¹⁵。現代の日本で「日本を取り戻す」必要性を主張するものは多く、安倍氏は「この道しかない」と言って「理想の日本」を取り戻そうとしているのだが、日本が世界の中心となった姿が、果たして真の「取り戻すべき日本」なのか？ 他の選択肢はないのか？ こうした疑問をどうしてもぬぐうことができない。

キルケゴール思想における重要な概念の一つに「反復」がある。当然、安倍氏の「取り戻し」とは異なる概念である。だが、小生は本書を読み、キルケゴールのキリスト教概念とデンマーク・ナショナリズムとの密接な関係を知ること、デンマーク国家教会が示す「キリスト教」と、それとは異なるキリスト教を主張して孤高の戦いを強いられたキルケゴールに現代の日本の状況を重ね合わせずにはいられない。何を反復するのか、そのことは、個々人の実存に問われるべきであろうが、こうした場面でキルケゴールを読むことは決して無意味ではないと思いたい。

*¹⁵ 2015年の年頭所感で、首相は「先人たちは、高度経済成長を成し遂げ、日本は世界に冠たる国となりました。当時の日本人に出来て、今の日本人に出来ない訳はありません。」とおっしゃっている。取り戻すべき日本とは、「高度経済成長」期の日本であるようだが、それは、首相のもう一つのスローガン「戦後レジームからの脱却」と矛盾する。なぜなら「高度経済成長」は「戦後レジーム」期の現象であるからである。